様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４４１８
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３３２０１００

研究課題名（和文）モダリティに関する意味論的・語用論的研究

研究課題名（英文）A Semantic and Pragmatic Study of Modality

研究代表者
澤田　治美（Sawada, Harumi）

関西外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：２００２０１１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の成果は以下のようにまとめることができる。
①モダリティに関して、「証拠性」に基づいた新しい分析視点を確立した。②英語だけでなく、スウェーデン語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、（古典）日本語など多岐にわたる言語資料を材料とした。③志向性、推意、言語行為論、驚嘆性、コントロールサイクル、ダイクシス、会話分析、因果性、主観性、動機づけ、“modality packaging”、条件性など多様な概念や枠組みを用いて分析がなされた。

研究成果の概要（英文）：The result of the research can be summarized as follows: First, A new viewpoint of analysis was established based on “evidentiality.” Second, the analysis was carried out based on various language materials such as English, Swedish, Spanish, Portuguese, French, (Classic) Japanese. Third, the analysis was done by incorporating various concepts and frameworks, including intentionality, implicature, speech act theory, mirativity, control cycle, deixis, conversation analysis, causality, subjectivity, motivation, “modal packaging,” and conditionality.

研究分野：語用論

キーワード：モダリティ　推意　言語行為論　驚嘆性　コントロールサイクル　ダイクシス　因果性　"modality packaging"

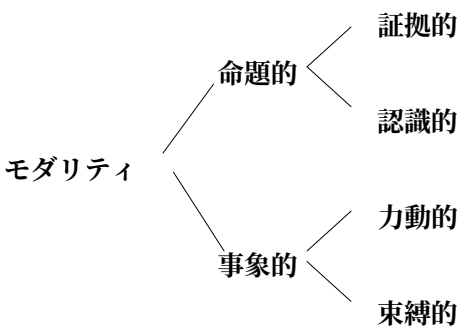
１．研究開始当初の背景

（１）モダリティの言語学的研究は、1990年代から今日にかけて急速に進展し、世界各地でワークショップがしばしば開催され、論文集、論文、専門書があいついで出版されてきた。枠組みも、生成文法、認知言語学、語用論、関連性理論、語法研究など多種多様である。

（２）モダリティ研究の学術的背景として、以下の点が挙げられる。

第１点は､定義と分類に関する背景である。現在、モダリティの定義は研究者の間で意見の一致を見ているとは言い難い。「発話時における話し手の心的態度」という定義では、英語（あるいは、スペイン語など）には適用できない。

第 2 点は、意味分類に関する背景である。意味分類の出発点として挙げられるのが、Palmer による分類である。



しかし、この分類では、「自発的モダリティ」、「感情的モダリティ」、「言語行為的モダリティ」はこの分類には収まりきらない。また、英語には「証拠的モダリティ」はないとされるが、伝聞表現（「らしい」、「そうだ」など）の発達した日本語では証拠的モダリティが豊かである。

第 3 点は、“subjectivity”に関する背景である。現在、“subjectivity”に関して重要な研究があいついでおり、Traugott と Langacker の立場の違いが鮮明になりつつある。前者は表現の「主観性」や「主観化」を、後者は捉え方（construal）の「主体性」を問題にする。モダリティと“subjectivity”の関係は、今や意味論の最も重要なテーマの一つとなっている。

２．研究の目的

本研究の目的は「モダリティ」に関して、以下の 4 つの問題を明らかにすることである。

①その一般的な定義とは何か、それはどのように分類されるか（定義と分類の問題）。

②それは他の意味的カテゴリー（未来性、因果性、条件性、証拠性、仮想性、驚嘆性（mirativity）、恩恵性、情報構造など）とどう関係しているのか（意味関係の問題）。

③それはコンテクストや言語行為とどう関係しているのか（コンテクストの問題）。

④それは話し手の心的態度や視点とどう関係しているのか“（inter）subjectivity（（間）主観性/（間）主体性の問題）。

３．研究の方法

以下の通り、平成 23 年度から 26 年度にかけて 7 回の国際モダリティワークショップを開催した。その際には、研究代表者、研究分担者は必ず研究発表をするとともに、スウェーデン、カナダ、ブラジルから国際的に著名な研究者を招聘し、また、国内からも著名な研究者を招聘した。そして、1 巻～７巻にわたる発表論文集『国際モダリティワークショップ発表論文集――モダリティに関する意味論的･語用論的研究――』を発行した。

第 1 回　平成 24 年 3 月（発表者 10 名）
第 2 回　平成 24 年 8 月（発表者 9 名）
第 3 回　平成 25 年 3 月（発表者 10 名）
第 4 回　平成 25 年 8 月（発表者 9 名）
第 5 回　平成 26 年 3 月（発表者 10 名）
第 6 回　平成 26 年 8 月（発表者 10 名）
第 7 回　平成 27 年 2 月（発表者 8 名）

４．研究成果

本研究の成果として挙げられるのは、以下の点である。

①モダリティとは何かという定義の問題に関して、暫定的ながら、以下のような結論に達した。

モダリティとは、事柄（すなわち、状況・世界）に関して、たんにそれがある（もしくは真である）と述べるのではなく、その事柄に関する情報はどのようにしてもたらされたのか、その事柄はどのようにあるのか、あるいは、あるべきなのかということを表したり、その事柄に対する知覚や感情を表したりする意味論的なカテゴリーである。

この定義には、「発話時の話し手の立場」や「話し手の発話・伝達的態度」という概念は関わってはいない。また、ここには、モダリティの中に「証拠性」（エビデンシャリティ）を含めている。この定義は、日本だけでなく、世界的に見ても、ユニークなものであると考えられる。

②モダリティに関する言語事実の分析において、英語だけでなく、スウェーデン語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、（古典）日本語など多岐にわたる言語資料を材料とすることが可能となった。

③モダリティの分析視点に関して、志向性、推意、言語行為論、驚嘆性、コントロールサイクル、比較、ダイクシス、会話分析、因果性、主観性、動機づけ、指小辞シフト、指示し、“modality Packaging”、条件性、言語教育など多様な概念や枠組みを用いて分析がなされた。

すべての研究成果は『モダリティに関する意味論的・語用論的研究』と題して２巻本として製本される予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 46 件）

『科学研究費補助金による国際モダリティワークショップ　発表論文集　第 7 巻』2015

英語の存在構文の意味論と語用論 <u>澤田治美</u> pp. 9-24 査読無／Pretending Revisited: How Pretense Works for the Production of Disjunctions <u>Susumu Kubo</u> pp. 25-44 査読無／Irrealis としてのスペイン語接続法と未来 <u>和佐 敦子</u> pp. 45-58 査読無／指示詞の語用論的対照研究―現場指示用法を中心に― <u>澤田　淳</u> pp. 59-78 査読無／英語条件文に関与する認知をめぐって <u>長友　俊一郎</u> pp. 79-98 査読無／The Meanings of the Japanese Scalar Adverbs *yoppodo* and *kaette* and Their Projective Behaviors <u>Osamu Sawada</u> pp. 99-120 査読無／

『科学研究費補助金による国際モダリティワークショップ　発表論文集　第 6 巻』2014

認識的モダリティと証拠的モダリティの間 <u>澤田　治美</u> pp. 45-78 査読無／On Pretending: A Regulation Theoretic Account <u>Susumu Kubo</u> pp. 79-98 査読無／発話の瞬間同時性と否定、疑問化、条件化 <u>吉良　文孝</u> pp. 99-112 査読無／スペイン語のテンスとモダリティ <u>和佐　敦子</u> pp.

113-122 査読無／英語モダリティと概念化について 長友　俊一郎 pp. 123-140 査読無 ／ Modality, Polarity, and Intensification: The Meaning and Distributions of the Japanese Negative Use of *totemo* ‘very’ Osamu Sawada pp. 141-158 査読無／日本語ダイクシスの歴史的研究―直示動詞、指示詞、敬語を中心に― 澤田　淳 pp. 159-189 査読無／

『科学研究費補助金による国際モダリティワークショップ　発表論文集　第 5 巻』2014
英語モダリティの分類と否定の作用域 澤田　治美 pp. 65-86 査読無／Modality-shifting in Conversation Susumu Kubo pp. 57-102 査読無／モダリティと単純現在時制の意味論 吉良　文孝 pp. 103-108 査読無／Exclamative Sentences and Mirativity Atsuko Wasa pp. 109-114 査読無／モダリティとコントロール・サイクル 長友　俊一郎 pp. 115-136 査読無／Comparison and Goal-orientedness Osamu Sawada pp. 137-154 査読無／英語指示詞 that/there における聞き手への指標詞シフトについて 澤田　淳 pp. 155-186 査読無／

『科学研究費補助金による国際モダリティワークショップ　発表論文集　第 4 巻』2013
テンス、アスペクト、モダリティの階層性をめぐって―否定とモダリティの観点から― 澤田　治美 pp. 11-32 査読無／不確定性：不定表現と調整行為 久保　進 pp. 33-50 査読無／Could と実現性の含意 吉良文孝 pp. 51-62 査読無／スペイン語の逆接を表す Si 条件節と日本語の不同意表現 和佐 敦子 pp. 63-74　査読無／束縛的モダリティを表す英語（疑似）法助動詞構文をめぐって 長友　俊一郎 pp. 75-102 査読無／The Meaning and Use of Noteworthy Comparison Osamu Sawada pp. 103-140 査読無／日本語ダイクシスの歴史的展開―「Vて来る」の拡張パターンを中心に― 澤田　淳 pp. 141-180 査読無／

『科学研究費補助金による国際モダリティワークショップ　発表論文集　第 3 巻』2013
Epistemic Modality and Causal Inference System Harumi Sawada pp. 25-34 査読無／Zero Degrees of Certainty―Telling a Lie and Regulation Susumu Kubo pp. 35-54 査読無／Two Kinds of ‘Possibility’― *Can* and *May* Fumitaka Kira pp. 55-64 査読無／Mirativity in Spanish and Japanese Atsuko Wasa pp. 65-74 査読無／動機づけとモダリティ表現―if you must … の意味とコンテクスト― 長友　俊一郎 pp. 91-102 査読無／The Context-dependency of Japanese Diminutive Shift Osamu Sawada pp. 103-120 査読無／英語指示詞の運用とその語用論的メカニズム―遠称指示詞における指標詞シフトの現象を中心に― 澤田　淳 pp. 121-148 査読無／

『科学研究費補助金による国際モダリティワークショップ　発表論文集　第 2 巻』2012
英語における認識的モダリティと因果的推論システム 澤田　治美 pp. 35-57 査読無／条件文帰結節における be going to の意味機能について 吉良　文孝 pp. 59-67 査読無／モダリティと英語教育 長友　俊一郎 pp. 69-77 査読無／Imprecision and Speaker-orientedness in the Interpretation of Japanese Minimizers Osamu Sawada pp. 79-98 査読無／ダイクシスと語用論―英語指示詞における指標詞シ

フトについて― 澤田　淳 pp. 97-107 査読無／

『科学研究費補助金による国際モダリティワークショップ　発表論文集　第 1 巻』2012
Could＋完了形構文の多義性をめぐって 澤田　治美 pp. 53-66 査読無／調整理論とモダリティ―‘We’の志向性をめぐって― 久保　進pp. 67-86 査読無／条件節における認識的willの意味機能について 吉良　文孝pp. 87-98 査読無／モダリティと驚嘆性 和佐敦子 pp. 99-106 査読無／動機づけと英語条件文について 長友　俊一郎 pp. 107-126 査読無／Expressivity and Measurement: The Case of the Japanese Degree Adverb *motto* Osamu Sawada pp. 127-152 査読無／ダイクシスを捉える枠組みとその語用論的基盤―ダイクシスの定義と認定基準の問題を中心に― 澤田 淳 pp. 153-176 査読無／

６．研究組織
(1)研究代表者
澤田　治美（SAWADA, Harumi）
関西外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：20020117

(2)研究分担者
久保 進(KUBO,　Susumu)
松山大学・経済学部・教授
研究者番号：00098766

和佐 敦子　(WASA, Atsuko)
関西外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：20563985

吉良 文孝　(KIRA, Fumitaka)
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：30225099

澤田 治　(SAWADA, Osamu)
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：40598083

長友 俊一郎（NAGATOMO, Shunichiro）
関西外国語大学・英語国際学部・准教授
研究者番号：50594131

澤田 淳（SAWADA, Jun）
青山学院大学・文学部・准教授
研究者番号：80589804